

## 参考8：職業奉仕の森（職業人としてのロータリアンの務め）

「職業奉仕は難しい」という言葉をよく耳にします。理由は色々あるとは思いますが、大きな理由の一つは、ロータリーの大先輩達による職業奉仕の説明が、人によってかなり異なるからではないでしょうか？

例えば、職業奉仕は「職業倫理そのものだ」と主張する人もいれば、「職業を通じて社会に貢献することだ」、「Arthur Frederick Sheldon の考えそのものだ」、「天職（Vocation）として高潔な仕事をする事だ」などを主張する人もいます。さらに、四つのテスト、道徳律（職業倫理訓）、大連宣言などを説く人もいれば、現在の職業奉仕の公式定義である『標準ロータリークラブ定款（第6条の2）』を語る人もいます。

ここでは、説明を聞いている人が混乱するのは当然です。そうしたロータリーの大先輩達に共通する特徴は、「職業奉仕は一本の大木」であるかのような説明ではないでしょうか。しかし、私としては

**“職業奉仕は一本の大木ではない。むしろ、職業奉仕は森である。”**

と言いたいです。

森は、高い所、低い所、陽のあたる所、陽があたりにくい所など、各々の場所で生えている木々は違いますし、また互いに影響し合って生えています。しかし、それら全体で森なのです。ですから、例えば高い所に生えている木々だけを説明しても、その森の全てを語ったことにはなりません。それと同様に、

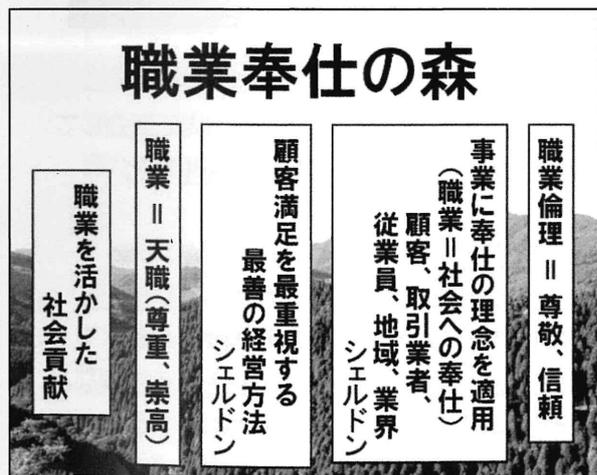
“職業奉仕に対する考え方は、歴史上、間違いなく幾つもある。すなわち、

職業奉仕という森には、異なる様々な木々が生い茂り、互いに影響し合って育っている。

だから、それらの木々全部を対象にして、はじめて職業奉仕が理解できるようになる。”

と思うのです。

では、「職業奉仕の森」にはどのような木々が生い茂っているのでしょうか？ 私は、以下に示したように、職業奉仕の森は5つの木々群（そのうちの2つは A F Sheldon の奉仕理念）からできていると思います。もちろん、最後に（1987 年以降）生い茂ってきたのが、「職業を活かした社会貢献」の木々群です。



- 職業倫理 = 尊敬、信頼
  - \* 職業倫理の高揚が尊敬と信頼を生み、事業は発展する
- A F Sheldon の奉仕理念
  - \* 事業に奉仕の理念を適用（職業 = 社会への奉仕）
    - 顧客、取引業者、従業員、地域、業界への貢献
  - \* 顧客満足を最重視する最善の経営方法
    - 顧客のニーズを最高に良く汲み取り、それを最高の形で満たすことにより、事業は発展する
- 職業 = 天職（尊重、崇高、高潔、使命）
- 職業を活かした社会貢献
  - \* 自己の職業上の知識や技術を活かした社会貢献

例えば、1931 年の「The Aims and Objects Plan (Pamphlet No.3)」に記された「職務や商取引上の倫理高揚、顧客や取引業者の配慮、従業員の幸福、事業の繁栄、業界と社会の発展」などの内容も、また、現在の職業奉仕の公式定義である『標準ロータリークラブ定款（第6条の2）』（2016 年）の内容も、上記の木々群のいずれかに相当すると言ってよいでしょう。

もちろん、この職業奉仕の森に名前をつけるとすれば、職業人としてのロータリアンの務めです。

職業奉仕 = 「事業経営者としてのロータリアンの務め」 + 「業界人としてのロータリアンの務め」

+ 「職業を活かした社会貢献」

= 自分の職業に関連したあらゆる分野において、奉仕の理念を实践すること

= 職業人としてのロータリアンの務め = 職業奉仕の森 → P53 参照